



地域医会だより

県央皮膚科医の会

平成30年度は県央皮膚科医の会の講演会を1回と、県央地域の中の大和市皮膚科医会の講演会を2回開催いたしました。

●第12回県央皮膚科医の会

日 時：平成30年11月1日（木）

会 場：オークラフロンティアホテル海老名

テーマ：「慢性蕁麻疹の病態生理と新しい治療」

講 師：日本大学医学部皮膚科分野助教 葉山惟大先生

●第13回大和市皮膚科医会

日 時：平成30年6月9日（土）

会 場：小田急ホテルセンチュリー相模大野

テーマ：「2018足・爪白癬診療 —update—」

講 師：まるやま皮膚科クリニック院長 丸山隆児先生

●第14回大和市皮膚科医会

日 時：平成30年10月20日（土）

会 場：小田急ホテルセンチュリー相模大野

テーマ：「アレルギー性皮膚疾患に対する治療戦略 ～かゆみ対策のノウハウ～」

講 師：野村皮膚科医院院長 野村有子先生

（文責：矢口 厚）



地域医会だより

横浜市皮膚科医会

【平成30年度の事業報告】

1. 例会について

・第149回例会

日 時：平成30年4月7日（土）

会 場：関内新井ホール

共 催：大鵬薬品工業株式会社

教育講演：「アトピー性皮膚炎患者に対するコミュニケーションの重要性 ～コミュニケーション技法からトラウマケアまで～」

講 師：大阪医科大学附属病院医療管理室室長・教授 上田英一郎先生

病院紹介：(症例含め) 横浜労災病院

特別講演：「蕁麻疹診療の最前線」

講 師：市立島田市民病院副院長兼皮膚科主任部長 橋爪秀夫先生

参加者：56名

・第150回例会

日 時：平成30年7月1日(日) 県皮膚科医会と合同

内容は省略

・第151回例会(50周年記念)

日 時：平成30年9月30日(日)

会 場：ホテルニューグランド ペリー来航の間

50周年記念式典

横浜市皮膚科医会 思い出の数々 滝沢清宏先生

横浜市皮膚科医会 昨日今日明日 増田智栄子先生

横浜市皮膚科医会50周年記念講演会

「幕末・明治の横浜にタイムトラベル、どんな地形どんな医療が見えてくる？ プラタモリ風に、JIN・仁・も登場」

横浜開港資料館館長 西川武臣先生

国際親善総合病院皮膚科 山田裕道先生

祝賀会

独唱：蒲原 毅先生

連弾：岡澤ひろみ先生、羽尾貴子先生

パフォーマンス：宋寅傑先生(皿回し、ヌンチャク)

合唱：神皮混声合唱団

参加者：一般88名(ご招待28名)、法人37名

2. 第10回横浜市皮膚科医会市民公開講座について

日 時：平成31年3月17日(日)

会 場：横浜情報文化センター 情文ホール

共 催：株式会社ポーラファルマ

テーマ：「正しいスキンケア ～美肌・健康肌になろう！」

講演1：「若さを保つお肌のお手入れ」

講 師：増田智栄子先生

講演2：「健康を保つ体のスキンケア」

講 師：蒲原 毅先生

講演3：「スキンケア必須アイテム」

講 師：野村有子先生

参加者：107名(+医師17名)

3. 医師会関連イベント

・ラジオ日本「みんなの健康」

①日 時：平成30年7月12日（木）、19日（木）放送

テーマ：「大人のニキビ・思春期のニキビ」

担 当：野村有子先生

②日 時：平成31年2月7日（木）、14日（木）放送

テーマ：「注意したい脱毛症」

担 当：齊藤典充先生

・学術集談会

日 時：平成30年12月1日（土）

テーマ：「就寝時や帰宅後に生じる足の痒みや違和感について」

講 師：杉田泰之先生

4. 皮膚科医会共催講演会

日 時：平成30年10月24日（水）

会 場：横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズ

共 催：サノフィ株式会社

一般講演：「当院におけるデュピクセントの使用経験」

講 師：けいゆう病院皮膚科部長 河原由恵先生

特別講演：「ここまでわかったデュピクセントの実力」

講 師：NTT東日本関東病院皮膚科部長 五十嵐敦之先生

参加者：72名

（文責：高橋泰英）



地域医会だより

鎌倉市皮膚科医会

女性医師7人、男性医師2人で構成しています。

今年度の活動はありません。

（文責：原 尚道）



地域医会だより

藤沢市皮膚科医会

日時：平成30年7月18日（水）19：30～

会場：湘南クリスタルホテル5階「ボンヌ・チャンス」

講師：埼玉県済生会川口総合病院皮膚科主任部長 高山かおる先生

テーマ：「治療効果を上げるためのフットケアの実践up to date」

日時：平成30年11月28日（水）19：00～

会場：藤沢市医師会館

講師：神奈川県立こども医療センター 皮膚科部長 馬場直子先生

テーマ：「小児アトピー性皮膚炎の治療戦略」

日時：平成31年3月13日（水）19：30～

会場：湘南クリスタルホテル5階「ボンヌ・チャンス」

講師：東海大学医学部専門診療学系皮膚科学教授 馬渕智生先生

テーマ：「乾癬の治療と患者指導」

（文責：小林誠一郎）



地域医会だより

川崎市皮膚科医会

●川崎市皮膚科医会第16回定時総会／第24回川崎市皮膚科医会例会学術講演会

平成30年10月3日（水）にホテル精養軒（武蔵小杉）にて第16回川崎市皮膚科医会定時総会・第24回川崎市皮膚科医会例会学術講演会を開催しました。

総会は望月明子会長の挨拶の後、石橋正史先生（日本鋼管病院皮膚科部長）が議長として選出され、第1号議案「平成29年度会務報告に関する件」以降、第5号議案「役員人事に関する件 会長が望月明子先生から井上奈津彦先生に交代」まで円滑に承認され無事終了しました。

講演会は下記の要領で開催しました。

第24回川崎市皮膚科医会例会（学術講演会）

ミニレクチャー

座長：帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科教授 栗野嘉弘先生

テーマ：「爪白癬の疫学と治療」

講師：帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科 下山陽也先生

特別講演

座長：はるひ野皮膚科クリニック院長 渡部秀憲先生

テーマ：「黒い“できもの”の見分け方」

講師：聖マリアンナ医科大学皮膚科教授 門野岳史先生

ミニレクチャーは爪白癬の診断と治療について、特別講演では豊富な臨床写真とダーモスコピー所見、最新の免疫チェックポイント阻害薬による治療法まで、両先生よりとてもわかり易くご講演していただきました。



井上新会長よりご挨拶



懇親会

●川崎市市民公開講座

日時：平成30年11月4日（日）

会場：川崎日航ホテル

来場者数：52名

相談者数：7名

行事内容：講演会、皮膚の健康相談コーナー（個別）を開催

講演：「受診したほうがいいのか？～あざとほくろの話～」

講師：帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科教授 栗野嘉弘先生

主催：川崎市皮膚科医会

共催：川崎市医師会、マルホ株式会社

後援：川崎市



栗野先生のご講演



役員一同

(文責：渡部秀憲)

○ ○ ○ ○ ○
地域医会だより

三浦半島皮膚科懇話会 横須賀市医師会皮膚科部会

【第50回三浦半島皮膚科懇話会・第33回横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会】

日 時：平成31年2月9日（土）

会 場：メルキュールホテル横須賀

製品説明：ヒルドイドフォーム

特別講演：「アトピー性皮膚炎におけるスキンケア ～発汗からみた外用薬の使い方～」

講 師：杏林大学名誉教授 塩原哲夫先生

座 長：金丸哲山先生

アトピー性皮膚炎におけるスキンケア ～発汗からみた外用薬の使い方～

杏林大学名誉教授 塩原哲夫先生

アトピー性皮膚炎（AD）の病因として、バリア機能の低下によるアレルギーの経皮的感作が注目されている。一方、汗は皮膚の角層水分量を著明に増加させ皮膚の乾燥を防ぐ役割をしているにも拘わらず、AD発症における役割は殆ど注目されてこなかった。しかし実際、AD患者で検討してみると、皮疹発症前から非病変部でも著明な発汗障害を認め、病変の進行とともに全身性の発汗障害になっていくことが分かった。何故、こんなにADが増えてしまったのかを考えた時、そこには我々が良しとしてきたライフスタイルにその原因を求めざるを得ないのは残念なことであるが、このような発汗障害には、住環境の低湿度化とライフスタイルの変化が大きな影響を与えている。それに加え、発汗をADの増悪因子と考え、発汗させないように指導してきた医師側の責任もあるかもしれない。発汗低下による皮膚の乾燥化こそがアレルギーに対する感作を容易にし、ADの増大に大きな役割を果たしていると考えられる。我々人類がこの地球でこの



ように発達し得た大きな原因として全身に汗をかくという機能の獲得が大きかった事を考えると、我々人類は我々が作り出した快適な住環境の結果として、今やADの増加という新たな試練に直面しているのかもしれない。それに対し、我々はどのような方法で発汗を促す事により、ADの発症を軽減させ得るかを探求すべきではないかと思われる。汗に対する認識はここ10年で大きく変わったとはいえ、まだ汗に対する影響を考えての治療とはなっていない。本講演では如何に発汗を亢進させることで、難治性であったADが軽快するかについて述べてみる。汗の働きに目覚めた医師こそが、これからのAD治療の中心になっていくことを望むや切なるものがある。

（文責：金丸哲山）



地域医会だより

小田原皮膚科医会

平成30年度は学術講演会を下記の通り開催いたしました。

【第648回小田原医師会・足柄上医師会合同学術講演会】

日 時：平成30年9月25日（火）

会 場：おだわら総合医療福祉会館

テーマ：「アレルギー性皮膚疾患のみかた」

講 師：埼玉医科大学病院皮膚科教授 土田哲也先生

座 長：大林医院 大林寛人先生

共 催：大鵬薬品工業株式会社

参加人数：25名

アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、接触皮膚炎、薬疹に関して、それらの原因や臨床症状、最新の治療法を、多数の臨床写真を使って大変わかりやすくご講演いただきました。

講演後の質疑応答では、フロアーの内科の先生方から日常診療における多くの疑問が寄せられました。

令和元年度の学術講演会は、9月26日（木）に下北沢病院・足病総合センター理事長の久道勝也先生をお招きし、“内科疾患と足の皮膚病”というテーマで講演をしていただく予定となっております。

（文責：相川洋介）



地域医会だより

茅ヶ崎医師会皮膚科部会

【講演会】

日 時：平成30年11月20日（火）

会 場：茅ヶ崎市勤労市民会館 3階B研修室

テーマ：「今年度経験した興味深い症例」

講 師：茅ヶ崎市立病院皮膚科医長 武山絃子先生

（文責：小野秀貴）

平塚市医師会皮膚科部会

【第77回例会】

日 時：平成30年5月23日（水）

会 場：グランドホテル神奈中平塚

テーマ：「脱毛症診療について」

司 会：平塚市民病院皮膚科 藤尾由美先生

出席者：44名

1. 製品紹介「ルパフィン錠について」
2. 総会
3. 講演

テーマ：「治子コレクション—Ⅶ 皮膚病の色 その②」

講 師：関東中央病院特別顧問 日野治子先生

4. 特別講演

テーマ：「脱毛症診療アップデート —円形脱毛症とアトピー性皮膚炎の関連も含めて—」

講 師：杏林大学医学部皮膚科学教室 大山 学先生

要旨

脱毛症の代表的疾患である円形脱毛症は比較的境界明瞭な脱毛斑を呈することが臨床的特徴である。しかし、同様の限局性の脱毛を呈する疾患は多々あるため正しく鑑別することが大切である。その鑑別にはトリコスコピーが有用でトリコチロマニアなど診断の難しい症例でもfollicular microhemorrhageなどの特徴的所見が得られれば診断可能である。それでも診断が困難な場合には皮膚生検を行うが、脱毛症では水平断標本を用いて毛周期の異常を確認できるよう心掛けたい。

円形脱毛症の病態は最近、急速に解明されつつあり、遺伝的素因やアトピー素因などを背景にIFN γ シグナル系の活性化による毛包の免疫学的特権の破綻と毛包関連抗原特異的NKG2D+CD8+T細胞の活性化による成長期毛近位端への自己免疫応答であると考えられている。また、免疫応答による組織障害が全面に出る急性期と休止期毛が目立ち炎症反応に乏しい慢性期の異なる病態が存在する。日本皮膚科学会診療ガイドラインではステロイド局注、局所免疫療法、ステロイド外用、ステロイドパルス療法などが推奨されているが、それぞれの作用機序を考え病態に即した治療の選択を心掛けるべきである。例えば局所免疫療法は症状固定期＝慢性期、パルス療法は急性期に適している。また、海外では本症で重要なIFN γ -IL15ループを阻害するJAK阻害剤の臨床研究が進んでおり今後の期待される。

5. 情報交換会

共 催：平塚市医師会皮膚科部会、田辺三菱製薬株式会社

【第78回例会】

日 時：平成30年9月26日（水）

会 場：グランドホテル神奈中平塚

テーマ：「外用剤について」

司 会：かものはし皮膚科 木花 光先生

出席者：28名

1. 製品紹介「ドボベッドゲルの製品的特性について」

2. 特別講演

テーマ：「基剤から考える外用剤の選び方と使い方」

講師：杏雲堂病院診療技術部 大谷道輝先生

要旨

皮膚外用剤は主薬だけでなく、基剤や剤形が皮膚透過性や効果に大きく影響する。皮膚外用剤は、基剤中に溶けている主薬が皮膚を透過し効果を発現する。軟膏では基剤中に主薬を高濃度で溶かすことが困難な場合が多く、プロピレングリコールなどの可溶化剤が使用されている。プロピレングリコールは軟膏基剤に分散しにくいいため、界面活性剤が配合されている。デルモベート軟膏は、この界面活性剤が配合されていることから滲出液を容易に吸収するが、配合されていないアンテベート軟膏は吸収しない。

クリームは主薬が基剤中に溶解している割合が高く、基剤が乳化していることから、透過性が優れている。一方、多くの論文ではステロイドの軟膏とクリームの効果や副作用に大差は認められていない。基本的には、密封療法ではクリームを選択すべきである。

皮膚外用剤の患者への説明では、基剤や剤形にも注意が必要である。皮膚外用剤の塗布量は、伸びが大きく影響する。伸びが良すぎても、悪くても塗布量は減少する。皮膚外用剤の伸びはインタビューフォームにも示されている「降伏値」で判断する。平成26年3月から、薬剤師も患者に軟膏などを塗っていいことが、厚生労働省により通達された。今後は、外用療法を薬剤師も活用することで、アドヒアランスの確認や向上を図るべきである。

3. 講演

テーマ：「治子コレクションⅧ 色色-3」

講師：関東中央病院特別顧問 日野治子先生

4. 情報交換会

共催：平塚市医師会皮膚科部会、協和発酵キリン株式会社

【第79回例会】

日時：平成31年1月23日（水）

会場：プレジール平塚

テーマ「皮膚外科学について」

座長：平塚共済病院皮膚科部長 竹林英理子

出席者：26名

1. 製品紹介「外用副腎皮質ホルモン剤アンテベート0.05%について」鳥居薬品株式会社

2. 特別講演

テーマ：「エビデンスからみた皮膚外科学とそのエッセンス」

講師：慶應義塾大学皮膚科学講座助教 中村善雄先生

要旨

皮膚外科は皮膚生検から各種郭清術に至るまで大きさ・難易度共に多岐にわたるが、皮膚科医すべてが関わる重要な分野である。手術は症例・技術の画一性を保つのが難しいため、エビデンスの構築が難しい分野であるが、実臨床で根拠に基づいた治療を提供するため、現存するエビデンスと実際の症例を交えて①基本手技の復習 ②皮膚がんの切除マージン ③腫瘍外科の観点からみた手術について解説を行った。

基本手技に関してはrelaxed tension skin lineの成り立ち、分層植皮時のメッシュは倍率通りに進展しないこと、人種によるオープントリートメントの適応の違いなどに触れながら、各種操作・再建方法を振り返った。皮膚がんの切除マージン設定については、基底細胞癌（BCC）の本邦ガイドラインは現状白人のエビデンスに基づいて

おり、日本人ではより縮小手術が可能で断端陰性であれば追加切除は不要なこと。有棘細胞癌のマージンも切除断端陰性を得るためのエビデンスであり、断端陰性であれば標準マージンでなくとも追加切除はいらぬこと。逆に悪性黒色腫では、一定マージンで切除した際の無再発生存期間、全生存期間などをエンドポイントとしたエビデンスであるため病理学的な断端陰性であっても標準マージンを設定しなかった場合は追加切除が必要である、という違いについて説明した。最後に腫瘍外科の手術として、ICG navigation surgeryや各部位の郭清術の実際、adjuvant療法の台頭による未来の標準術式の予想について解説した。

3. 症例供覧

テーマ：「治子コレクションⅨ：カビ」

講師：関東中央病院特別顧問 日野治子先生

共催：平塚市医師会皮膚科部会、鳥居薬品株式会社

(文責：竹林英理子)



地域医会だより

厚木市皮膚科医会

●例会

例年通りに前期後期2回の例会を下記の通り行いました。

1. 第44回例会

日時：平成30年5月17日（木）

会場：レンブラントホテル厚木

講演1：「アトピー性皮膚炎の治療ならびに鶏卵アレルギー発症予防の提言について」

講師：国立研究開発法人国立成育医療研究センター生体防御内科部アレルギー科医長 大矢幸弘先生

講演中、注目すべきは鶏卵の経皮感作について。室内粉塵中に卵タンパクが高濃度に見られること、それによる経皮感作の可能性を示唆。

2. 第45回例会

日時：平成30年11月1日（木）

会場：レンブラントホテル厚木

講演1：「当院における乾癬治療 ～生物学的製剤を含めて～」

講師：厚木市立病院上席医長 唐川 大先生

厚木市立病院に常勤医長として赴任した唐川先生が、現在中心的に動いている乾癬治療の紹介。

講演2：「難治な慢性蕁麻疹に対する治療」

講師：西大沼皮フ科クリニック院長 高須 博先生

オマリズマブは有効であるが、診療所レベルで使用するには、使用前の薬剤溶解などの問題があり、敷居が高いと考えられる。

●厚木市医療フェスティバル

日時：平成30年10月10日（土）

毎年秋に市民に対して種々の取り組みをしています。皮膚科はミニレクチャーなどを行っていますが、今回は委員会活動のみでした。

●厚木愛甲地区専門校医（相談医）事業

皮膚科、産婦人科、整形外科、精神科の専門4科で学校保健に対応していこうとする会合です。元々日本医師会、その後文科省事業のモデル事業から始まった事業ですが、厚木市ではその有用性を考慮して、その後、市単位で行っており、その構成は小中校長代表、養護教諭代表、父母代表と4科医師からなります。そこで講演、FAXメール相談などを行っています。

（文責：小幡秀一）



地域医会だより

丹沢皮膚の会

●第42回 丹沢皮膚の会学術講演会

日 時：平成31年 2月27日（水）

会 場：秦野商工会議所

テーマ：「アナタに伝えたい褥瘡診療都市伝説！」

講 師：医療法人社団廣仁会札幌皮膚科クリニック院長 安部正敏先生

座 長：秦野尾尻皮膚科 生駒憲広先生

現在は年度に1回開催され、今年度は2月に開催しました。今回は35名（医師22人、コメディカルスタッフ13人）が来場されました。平成最後の会となりましたが、安部正敏先生の褥瘡の分類から褥瘡あるあるまでを非常にわかりやすく説明頂き、コメディカルの方にも大変好評で楽しい講義となり、盛会に終わりました。

（文責：加藤正幸）



懇親会の1コマ



今回の担当幹事である生駒憲広先生



講師の安部正敏先生



地域医会だより

相模原市医師会皮膚泌尿器科医会

【第213回学術講演会】

日 時：平成30年4月12日（木）19：30～

会 場：小田急ホテルセンチュリー相模大野

講演1：「当院におけるクレナフィン爪外用液の使用経験」

講 師：タナベ皮膚科医院院長 田辺健一先生

講演2：「粘膜疹を診る」

講 師：北里大学名誉教授 勝岡憲生先生

正中菱形舌炎、地図状舌、赤く平らな舌、いちご舌、白苔（舌苔）、黒毛舌、扁平苔癬、アフタ、びらん性口内炎、上記の疾患につき個々の症例写真を提示する。

共 催：相模原市皮膚泌尿器科医会、科研製薬株式会社

【第214回学術講演会】

日 時：平成30年6月14日（木）19：30～

会 場：ホテルラポール千寿閣

講 演：「皮膚疾患治療の現状」

講 師：帝京大学医学部皮膚科主任教授 多田弥生先生

決して得意とは言えなかった蕁麻疹診療が、エキスパートの先生方の座談会の内容をまとめるという仕事をきっかけに大きく変わり、少し得意になった、という貴重な経験をしましたので、共有させて頂きました。主なポイントは下記の通りです。1) 普通の蕁麻疹は治療の継続が重要であり、実際に患者が通院継続できるように説明する工夫が大切である。2) 因果関係の明らかでない原因検索は基本的には行わないが、増悪因子の間診は重要である。3) 早期治療開始は予後をよくするかもしれない。さらに、ルパタジンが抑制する血小板活性化因子（PAF）の多彩な作用やアナフィラキシーの重症度と血中PAF濃度の相関の最近のデータなどを紹介させて頂きました。

共 催：相模原市皮膚泌尿器科医会、田辺三菱製薬株式会社

【第215回学術講演会】

日 時：平成30年9月13日（木）19：30～

会 場：レンブラントホテル東京町田

講 演：「2018足・爪白癬診療Update」

講 師：まるやま皮膚科クリニック院長 丸山隆児先生

背景

イトラコナゾールとフルコナゾールの各長所を兼備えた新世代トリアゾール系抗真菌薬のネイリンカプセル（ホスラプロコナゾール）が発売された。広い抗真菌スペクトル、安全性プロファイルを持つネイリンカプセルの臨床成績を報告する。

方法

対象は、①第I趾爪に混濁部面積比25%以上の病変がある爪白癬患者 ②直接鏡検で皮膚糸状菌が確認された

患者 ③満20歳以上75歳未満の患者（153例：ネイリン群101例・プラセボ群52例）を多施設共同、プラセボ対照、無作為化、二重盲検、並行群間比較により試験した。ネイリン100mg（ラブコナゾールとして100mg）又はプラセボを1日1回食後に12週間経口投与し、その後、36週間を無治療で観察した。

結果

主要評価項目は投与開始48週後の完全治癒率（FAS）。ネイリン群は59.4%、プラセボ群は5.8%であり、ネイリン群はプラセボ群と比較して有意に高い値を示した。

結論

爪白癬治療では爪専用外用薬、新しい内服薬が近年登場したことより各薬剤の特徴を知って上手に活用することで爪白癬の治癒率をこれまで以上に改善できる可能性がある。

共 催：相模原市皮膚泌尿器科医会、佐藤製薬株式会社

【第216回学術講演会】

日 時：平成30年11月8日（木）19：30～

会 場：レンブラントホテル東京町田

講 演：「アトピー性皮膚炎治療における抗ヒスタミン薬の役割」

講 師：国際医療福祉大学医学部主任教授 菅谷 誠先生

アトピー性皮膚炎の治療は、原因・悪化因子の探索と対策、スキンケア、抗炎症外用薬による薬物療法が三本柱である。これらの治療に追加する補助治療としてはヒスタミン薬の内服などがあるが、搔破行動の抑制は皮膚炎の減弱につながりがあることから、itch-scratchcycleを止めることは重要である。アトピー性皮膚炎の痒みのメカニズムは複雑であり、欧米のガイドラインでは抗ヒスタミン薬の使用は勧められていないが、蕁麻疹や結膜炎を合併している場合使用が推奨されているため、抗ヒスタミン薬の処方をして萎縮するべきではない。アトピー性皮膚炎には内因性、外因性の概念があるほか、IL-17の産生に人種差や年齢差があることが報告されており、今後は層別化治療が主流になってくる可能性がある。保湿薬と抗ヒスタミン内服、環境改善による悪化の予防でコントロールできる状態が理想であると考えます。

共 催：相模原市皮膚泌尿器科医会、大鵬薬品工業株式会社

【第217回学術講演会】

日 時：平成31年2月14日（木）19：30～

会 場：小田急ホテルセンチュリー相模大野

講 演：「皮膚科のトリビア2019～疥癬診療の問題点と疑問点～」

講 師：浅井皮膚科クリニック院長 浅井俊弥先生

疥癬は、皮膚科医が見逃してはならない疾患のひとつであるが、その診断は容易でない場合も多い。日本皮膚科学会は2015年10月、疥癬診療ガイドライン第3版を策定した。2018年には追補版を発表し、水疱型疥癬、acropustulosis of infancyについて見解を述べた。今回の講演はその概略を紹介するとともに、集団感染に遭遇した際に、他職種間の情報伝達のツールとして有用な、疥癬グレード（SG）分類について報告した。

共 催：相模原市皮膚泌尿器科医会、マルホ株式会社

（文責：高須 博）